

すぎなみ大人塾 総合コース

第10回 GENERATION LAB ―コノ時代ヲ解説セヨ―

平成29年10月18日(水)午後7時から9時

テーマ：国語辞典から見えることばの変化

ゲスト講師：飯間浩明さん(三省堂国語辞典編集者)

於：セッション杉並 視聴覚室

コース学習支援者 (株)アソボット代表取締役 伊藤 剛

コース学習支援補助者 NPO法人場とつながりラボhome's

ファシリテーター 丹羽 妙

学習支援者 伊藤剛

本日はすぎなみ大人塾「GENERATION LAB」の10回目の講座ですが、公開講座になっております。

それでは、本日のゲスト講師をご紹介します。『三省堂国語辞典』編纂者の飯間浩明さんです。よろしくお願いいたします。

ゲスト 飯間浩明

よろしくお願いいたします。私は国語辞典を作っています。辞書を作る人々を題材にした三浦しをんさんの「舟を編む」という小説をご存じの方も多いでしょう。私もあの作品とよく似た世界に住んでいます。

私が携わっている辞書は『三省堂国語辞典』。とてもいい辞書ですよ。どこがいいか――一言で説明するのは、ちょっと難しいですね。私は言葉を扱っていても、どうも口下手で困ります。

ただしゃべるだけなら簡単なんです。私も、1時間ぐらい話をすることはできるでしょう。ところが、その1時間の中で言いたいことを伝えるための、うまい表現がなかなか見つからない。ここに、私にとっての言葉の限界を感じます。

大学の授業でも、学生に向かって一生懸命伝えているのですが、うまく伝わってないことも多いです。 「AではなくBと考えるのが正しい」と伝えたのに、学生は「Aが正しい」と理解することがあります。発言の趣旨が正反対に受け取られています。これには驚きません。

今日は、そういうことが極力ないようにしたい。そのために、まず、私が伝えたい趣旨を一言でまとめておきます。それは、「言葉は全部変わる」ということです。

「言葉が変わる」ということは、皆さんは時々お感じになるでしょう。たとえば、『やばい』という言葉の意味が変わってきたな」というように。

でも、今日は、そういう新語や俗語だけの話をするわけではありません。「言葉は時代とと

もに全部変わる」という話がしたいのです。

言葉は、時代とともに全体が変わっていきます。1970年代の言葉、1980年代の言葉というようにです。一部が変わるのではなく、全体が変わるということをまず申し上げておきます。

*

私は、国語辞典を作るために、活字や放送に限らず、ネットのブログや SNS も含めて、現代のあらゆる日本語を集めます。街を歩いていて、新しい言葉を見つけたときは写真をとります。日本語の実例をあちこちから集めていると、言葉はあらゆるところで変化していることを実感します。

最近街で見かけた言葉に「ペア割」があります。60分マッサージをするときに、ペア（2人）だと割引が適応されるという意味ですね。今の時代の人なら簡単に理解できる言葉です。ところが、20年前の人には、これがわからないはずで。

当時は「割」が割引を意味しなかったのです。「学割」はありました。「学生割引」の略語です。学割の「割」が独立し、「早割」「特割」など割引を表す用法が増えていき、いつしかこの用法が一般化しました。「ペア割」もこの流れの中に位置づけられます。

こうした「割」の用法の変化に気づく人がどのくらいいるのでしょうか。多くの人は見逃ごしてしまうでしょう。言葉の変化の多くは、このように、特に話題にもならず、静かに進行します。

*

「言葉の変化」というと、まず新語に注目が集まります。私も新語はたいへん重視しています。新語は次の世代にはごく当たり前の言葉になります。

今から9年前の2008年、『広辞苑』の第6版が出ました。その時に入った新語を挙げてみます。「いけ面」「癒し系」「うざい」「顔文字」「カミングアウト」「カルパッチョ」……。さらに、「マイブーム」「ユビキタス」「らしくない」「ラブラブ」「リベンジ」「レジ袋」などなど。

10年前はまだ新しい感じがしたのに、今ではふつうの言葉になっていることばが、案外多いということにお気づきになるでしょう。

「イケメン」は、私が目にしたのは21世紀になってからでした。『広辞苑』が載せた当時はまだ新しい感じがしました。私たちの『三省堂国語辞典』も、同じ年の2008年の版から「イケメン」を載せました。でも、今や「イケメン」がふつうになりました。「ハンサム」だと少し古いですね。こうして、知らないうちに、日本語のかなりの部分が最近まで新語だった言葉によって占められるようになります。

一方、だんだんに忘れ去られて、いつの間にか現代日本語から退場している言葉も多くあります。そういう言葉は、辞書からも削除します。

『広辞苑』はあまり削除をしません、『三省堂国語辞典』は最新版で数百語を削除しました。

「網カーラー」「胃集検」「MO」「肝臓ジストマ」「勘ピューター」「クリアビジョン」「毛ピン」……。それから、「乳柱」「鳥人」「通添」「テープデッキ」「日本住血吸虫」などなど。

こういう言葉は、今はほとんど目にしませんし、多くの人には知らないでしょう。辞書でも引かれないだろうという判断のもと、項目を削除しました。

この中にある「乳柱」とはなんでしょうか。昔の辞書でひいてみますね——「ちばしら」と読みます。離乳食のことだそうです。江戸時代の文献にも見えることばです。まあ、現代語の辞書にはいらなないと思います。

新語を追加し、古い言葉を削除する。辞書の新陳代謝をはかるわけですね。辞書の新版が出るというと、多くの方は、おそらくこういう作業を想像するでしょう。

でも、これは、辞書の改訂作業のごく一部に過ぎないのです。

*

辞書を新しくするとき、特に新しい言葉、古い言葉以外は、そのまま手をつけないと思いませんか？

実は、そうではありません。新語や廃語以外の、ごく普通の言葉についても、説明を大幅に見直しています。旧版にある説明に、時代とズレた部分はないか、不十分な部分はないか、そういったところを点検する、大がかりで持続的な作業を行います。これを私たちは「手入れ」と呼んでいます。

実際の「手入れ」の例として「テレビ」を見てみましょう。「テレビ」はごく日常なことばですが、1960年の版では「テレビジョン」の項目で次のように説明していました。

〈テレビジョン 実際のけしき・ありさまを電波ではなれた土地に送ってスクリーンの上に写し出す装置。電視。ビデオ〉

すごい技術ができたという感じが伝わってきます。当時は画面を「スクリーン」と呼んでいたのでしょうか。今はちょっと違和感がありますね。この説明は、今の私たちが思い描くテレビのイメージとは異なっています。

1974年の版では、「スクリーン」という説明を「ブラウン管」に変えました。最新の2014年の版では、「テレビジョン」ではなく「テレビ」に詳しい説明を書きました。

〈テレビ←テレビジョン ①動く映像や音声、文字などの情報を、電波やケーブルを使っ

て広い範囲に放送するしくみ。テレビ放送。〔下略〕

「電波」だけでなく「ケーブル」という言葉も足し、ケーブルテレビやインターネットテレビも意識しました。数十年の間に、テレビという言葉、感じ方もかわってきたのです。

「ブラウン管」の説明も、従来と今では違っています。2008年の版では「テレビなどで画像を映すのに使う、先の広がった管」などとしていましたが、2014年の最新版ではこうです。

〈ブラウン管 昔のテレビなどに使った管。先が広がって四角の画面になっており、外からとどいた電気信号が光の画像に変わる〉

今はブラウン管を使っているテレビは少なくなりました。そこで「昔のテレビなどに…」と説明しています。「ブラウン管」の説明を、現在では変えなければならなくなったということです。

「キーパンチャー」という言葉があります。情報を打ち込むことを仕事にする人でしたが、今はコンピューターなどの機器をたたく仕事を専門にする人はいないでしょう。職業としては過去のものになりました。そこで、これも最新版では過去形で説明しています。

〈キーパンチャー 昔の大型コンピューターで、キーをたたいて情報を入力する仕事をした人〉

「投稿」という言葉も、新聞や雑誌に投稿する場合だけを考えてはいけません。今では、ネットの掲示板やブログが含まれています。メディアの発達と共に、投稿の意味も増えました。

あるいは、「翻訳」も説明が変わっています。2008年の版ではこうでした。

〈ある一つの国語で・話され（書かれ）たものを、ほかの国語に・なおすこと（なおしたもの）〉

ここで気になるのは「国語」という表現です。「国語」とはその国の標準的な言語。でも、翻訳とは、ある国語から別の国語に直すことだけを指すのでしょうか。

同じ国の中で、違う言葉に変える翻訳もありえますよね。たとえば、沖縄の古い言葉を共通語に直すのも翻訳です。アイヌ語を日本語に直すのも翻訳です。

つまり、翻訳とは、「ある言語を別の言語に訳す」としたほうが適切です。2014年の版の説明を示します。

〈翻訳 ある言語で〈話され／書かれ〉たものを、ほかの言語に〈なおすこと／なおしたものの〉〉

昔の辞書では、言語イコール国語と考えていたふしがありますが、国の枠組みと言語の枠組みは一致しません。

*

時代とともに、従来はこの説明でよかったけど、今は違う、という状況も、あらゆるところで生まれます。昔は、とりわけ、女性や社会的少数者・弱者に関する言葉の説明がひどかったですね。ある有名な国語辞典の1981年の版を引用します。

〈女 〔略〕狭義では、気が弱く、心のやさしい、決断力に欠けた消極的な性質の人を指す〉

〈十字架を負う 〔略〕先天的な身障児を生んだりして、親として耐えがたい苦難を負わされる〉

〈老婆 〔略〕年をとり過ぎて、年輪の古さだけが目に立つ婦人〉

こんな言葉でも1980年代当時は許されていたのです。今は出版できないですよ。当然ながら、不適切だと批判する声も多くなり、後の版では説明がやや改善しています。この辞書の2011年の版を見てみましょう。

〈女 〔略〕狭義では、心根がやさしくて決断力に欠ける面がある一方で、強い粘りと包容力を持つ女性を指す〉

〈十字架を負う どのような手段によっても消し去ることの出来ない苦悩（苦難）を一生負い続ける〉

〈老婆 だれの目にも年をとっていると感じられる女性〉

これでもまだつっこみ所はありますが、説明が変化していることは事実です。

私たちの『三省堂国語辞典』も人のことは言えません。前の版に当たる2008年の版で「女」を引くようになっていました。

〈女 人間のうち、子を生むための器官と生理を持つもの。女子。女性〉

これはどうでしょうね。生まれた時は器官があっても、病気などで器官をとったときに、女性でなくなるのかという問題が残ります。最新の2014年の版では次のようにしました。

〈女 人間のうち、子を生むための器官を持って生まれた人（の性別）。女子。女性。〔法律にもとづいて、この性別に変えた人も ふくむ〕〉

今年（2017年）、男性の同性愛者を思わせるキャラクターが笑いをとるコント番組が放送されました。1990年代には人気キャラクターだったのですが、放送後、ネットなどで批判が集中しました。昔は成立していたキャラクターが、現在は批判対象になりました。

『三省堂国語辞典』の最新版で「ホモ」を見ると、「←ホモセクシャル」と記してあるだけです。これは不十分な説明です。現在では「ホモ」は蔑称だという考え方が共有されるようになっていきますから、次の版では説明を詳しくする必要があります。

「おかま」の項目は、最新版では少し詳しく書かれています。

〈おかま ②〔俗〕女性のようなふるまいをする男性や、男性の同性愛者を（かろんじて／差別的に）呼ぶことば〉

少し前までは、「おかま」も「ホモ」と同じくテレビで盛んに使われることばでしたが、蔑称と考えられるので、こう説明しました。ただ、次の版では、もう少しはっきりと「差別的なことば」と書くべきだと考えています。

こうした言葉は蔑称だからといって、辞書から削除するのは適切ではありません。古い文学作品や映像作品で使われる言葉だからです。古い映画で知った言葉を辞書で確かめてみたら「差別的なことば」と書いてあった。それによって、「現在では軽々しく使うべきではないんだな」と読者が理解する、というようになれば、辞書は役割を果たしたことになります。

2016年に「LGBT」という言葉が一般化し、性的少数者への理解が少し深まりました。私たちの辞書でも、次の版では「LGBT」を載せる必要があります。こんな原稿を用意しています。

〈LGBT 〔←lesbian, gay, bisexual and transgender〕性的少数者。レズビアン・ゲイ・バイセクシャル〔=両性を愛する人〕・トランスジェンダー〔=体の性と心の性が異なる人〕〉

「LGBT＝性的少数者」とは言っても、ある資料では20人に1人とも言われます。絶対数は決して少なくありません。LGBTの人々を尊重する考えに立てば、基本的な言葉の手入れも必要になってきます。

『三省堂国語辞典』の2008年の版では、「恋愛」は「〔男女の間で〕恋をして、相手をたいせつに思う気持ち（をもつこと）」と説明していました。でも、現在の2014年の版では次のようになっています。

〈(おたがいに) 恋をして、愛を感じるようになること〉

性別の部分をなくしました。これでも十分にわかります。

「恋愛」の項目を見直すと、こんどは、男女の性愛に関わる他の項目についてはどうなんだ、ということになります。それらの項目も見直しました。

古典の言葉で、「男女」と記すべきものもありますが、「逢瀬 (おうせ)」「恋人」「肉体関係」などについては性の区別はしないようにしました。

「結婚」はどうでしょうか。2008年の版では「男性と女性が、正式の夫婦関係をむすぶこと」としてあります。2014年の版では、その後続けて〔法律用語は「婚姻」。海外では、同性婚もある〕と説明を加えました。

この2014年の時点では、海外で同性婚があると記するのが精一杯でした。ところが、2015年には渋谷区・世田谷区で同性婚に準ずる関係を認める「パートナーシップ制度」が導入されるなど、状況が変わりつつあります。辞書の結婚関係の記述も見直す必要があります。

*

言葉は、このように、あらゆるところでどんどん変わるのです。「上がる」という基本的な動詞ひとつ取っても、「気分が上がる」「アガるファッション」という新しい使い方が生まれています。最初に「言葉は時代とともに全部変わる」と述べましたが、言葉は、一部だけでなく、丸ごとそとと変わるのです。

「言葉が変わる」というと、不愉快に思う人も多いでしょう。でも、変わることは言葉の本質です。言葉が変わり続けるということに、興味と関心を持っていただきたいのです。変化する世界、変化する言葉をよく見て、「なぜこうなるのだろう」と理由や背景を考えてみてはどうでしょう。

*

では、これからワークショップに入ります。現在ただいまの言葉の意味を、皆さんならどう説明するでしょうか。「インターネット」「小説」「政治」「調理」「録音」。この5つの言葉から選んで説明してみてください。説明に当たっては、偏見や好みを反映させず、客観的に書いてください。

ここにはない言葉を選んでもかまいません。現代の人々に説明するなら、どう説明を組み立てればいいでしょう。それでは、スタートです。

伊藤

辞書といっても、いろいろあります。採集している言葉の数や、それぞれの辞書の毛色が違いますよね。

飯間

『三省堂国語辞典』は現代的な説明を心がけています。『広辞苑』は歴史的な観点を重要視していますし、『岩波国語辞典』、『新明解国語辞典』は、古い言葉をたくさんいれています。『明鏡国語辞典』も、『三省堂』と同様、現代的な視点で編集されています。これらの違いなどは、最近『国語辞典のゆくえ』（「NHK カルチャーラジオ」テキスト）という本を著しましたので、ご参考になさってください。

※ワークショップ終了

飯間

では、「恋愛」です。「恋愛……自分以外の存在に大事にしたい、恋しいと互いに感じる気持ち」。自分以外というのが、いい視点です。しかし、これだと、自分のお母さんも恋愛対象になっちゃいますが……。

「貞淑……横暴な態度に従う、または従う振りをすること」

「小説……言葉を駆使して散文中で自由に書くこと。壮大な歴史、市中のことなど、様々な話題を書いたもの」。何をどう書いてもいいというのは、小説の本質ですね。

「レジ袋……購買者が購入した物品をいれるポリエチレン性の袋。近年は、環境保護のため、使用しないことも勧められている」

「録音……個人のため、ビジネスのため、裁判のためにも使われる」

「政治……みなが平等で快適似暮らせるように様々な意見を取り扱うこと」

「政治……人間社会が秩序正しく全員が参加して行うこと。地域や多くの場合は選挙によって選ばれる」2つとも国と限定していないのがいいポイントです。政治の形態は民主主義以外にもあることも書いて欲しいです。

「インターネット……コンピューターネットワークから全世界を網羅した情報」

「冷凍食品……電子レンジや熱湯などで手軽に食せる調理済み商品。スーパーで特売品になっている」

「つぶやく……自分ひとりで話すこと。Twitter に投稿すること」

「調理……電子レンジなどの機器を使って、食事やおやつを作る加熱調理すること。チンするとも言う。味を整えること。世の中のことをわかりやすくする」

料理は「おいしくする」という要素を含みますが、調理はレンジでチンすることも含みます。

個性があつておもしろいですね。大事なポイントや、もうちょっと足した方がいいところもあります。

全般的に、今の人ならばよく分かる説明になっています。こうして、自分で辞書の説明をしてみると、辞書の作りも分かっていただけではないかな、と期待しています。

質問

言葉遣いを正そうと会社で考えています。しかし、正しい言葉が、本によって違うので、基準がわかりません。美しい言葉にした方がいいのか、それとも時代にあった言葉の方がいいのか。どちらがよろしいのでしょうか？

飯間

原則が 2 つあります。ひとつは、相手や相手の行為を尊重すること。もうひとつは、丁寧な気持ちを示すことです。それ以外の所に、過剰に神経をとがらせる必要はありません。

たとえば、「よろしかったでしょうか？」は間違っただけの使い方だと言われますが、文法的にはそうとも言えません。相手や相手の行為を尊重することとは無関係の部分なので、問題にする必要はないでしょう。

言葉だけでなく、動作や表情によって、丁寧な気持ちを伝えることができます。言葉は不十分でも、心をこめて頭を下げれば、気持ちが通じるでしょう。

簡単なお答えになってしまいましたが、いわゆる「ビジネス敬語」の本には、著者の作り出したマナーもあるので、過剰反応しないのが賢明です。私かよく人に勧めるのは、菊地康人さんの『敬語再入門』（講談社学術文庫）です。

質問

ほかの辞書を気にすることや、参考にとすること、引きずられることはありますか？

飯間

辞書を作っている時には、ほかの辞書は見ません。最終段階で、ほかの辞書を見て、参考にとすることはありますね。

質問

過去の言葉の歴史、使い方はどう調べるのですか？

飯間

昔の辞書で確かめます。それから、インターネットの「青空文庫」で過去の文学作品をみたり、「国会会議録」のデータベースで過去の国会での議論を見て、言葉の使い方を見ることもあります。しかし、それだけでは足りないもので、自分たちで独自のデータベースを作っています。

伊藤

飯間さん、ありがとうございました。

次回の講座では、さらに言葉の解釈、言葉をもっと深く知っていきたいと思います。

本日はありがとうございました。